

「このみじめな食物」

- 4 . 彼らはホル山から、エドムの地を迂回して、葦の海の道に旅立った。  
しかし民は、途中でがまんができなくなり、
- 5 . 民は神とモーセに逆らって言った。  
「なぜ、あなたがたは私たちをエジプトから連れ上って、この荒野で死なせようとするのか。  
パンもなく、水もない。  
私たちはこのみじめな食物に飽き飽きした。」
- 6 . そこで主は民の中に燃える蛇を送られたので、蛇は民にかみつки、イスラエルの多くの人々が死んだ。
- 7 . 民はモーセのところに来て言った。  
「私たちは主とあなたを非難して罪を犯しました。  
どうか、蛇を私たちから取り去ってくださるよう、主に祈ってください。」  
モーセは民のために祈った。
- 8 . すると、主はモーセに仰せられた。  
「あなたは燃える蛇を作り、それを旗ざおの上につけよ。  
すべてかまれた者は、それを仰ぎ見れば、生きる。」
- 9 . モーセは一つの青銅の蛇を作り、それを旗ざおの上につけた。  
もし蛇が人をかんでも、その者が青銅の蛇を仰ぎ見ると、生きた。

- 5 . 民は神とモーセに逆らって言った。  
「なぜ、あなたがたは私たちをエジプトから連れ上って、この荒野で死なせようとするのか。  
パンもなく、水もない。  
私たちはこのみじめな食物に飽き飽きした。」

hvm̄b.W~yhl̄ ʔBe~ [h' rBelyw  
rBd̄MB; tW̄hl' ~yrcMni W̄tyl̄ [h, hml' ]  
荒野 Qal.Inf. Hi.Pf. go up

~yhm̄ !yaw~x.l, !yaeyKi  
` l q̄ Qh; ~xLB; hcq' W̄v̄pn̄

#W̄ Qal.Pf. 大嫌い、ぞっとするほどの嫌悪、憎悪、吐き気を催すような恐れ、ウンザリする  
リベカがイサクに「私はヘテ人の娘たちのことで、生きているのがいやになりました。」 創 27:46  
神さまがその忌むべき風習の故にカナン人を「なはだしくきらった」レビ 20:23  
苦しめれば苦しめるほど、この民はますますふえ広がったので、人々はイスラエル人を恐れた。出 1 : 12  
数の多いイスラエルに対しモアブが「恐怖をいだいた」 民数記 22:3  
小国イスラエルが大国アラムとその虎の威を借るイスラエルを「恐れる」 イザヤ 7:16

l q̄ Qh. 卑しむべき、見下げ果てた、卑劣な、情けない、価値のない、役に立たない、無益な 見さげ果てた (直訳「軽い?パ

ン」)

## 説教

今日から新たに四月を迎えて私たちの新しい歩みが始まります。

そこで、今朝は、民数記 21 章の特に 5 節のみことばを肝に銘じて、新たな門出をしたいと思います。

この 5 節のみことばは、荒野で神さまに養われていたイスラエルが、荒野での生活に我慢できず漏らした言葉です。次にある通りです。

### 5. 民は神とモーセに逆らって言った。

**「なぜ、あなたがたは私たちをエジプトから連れ上って、この荒野で死なせようとするのか。  
パンもなく、水もない。  
私たちはこのみじめな食物に飽き飽きした。」**

ここで「このみじめな食物」とイスラエルの民が言っているのは「マナ」のことです。

マナは、見渡す限り広大な荒野でイスラエルの民が生きていけるようにと、神さまが天から降らせてくださった奇跡の糧でした。それがどういうものであったか解説がありますが、

色は白く、味は「蜜の入ったせんべいのよう」（出 16:31、民 11:7）に「おいしいクリーム味のよう」で、彼らは「それを集め、ひき臼でひくか、臼について、これをなべで煮て、パン菓子を作っていた」（民 11:8）と言います。生で食べてよし、煮て焼いて食べてよしという、まさに万能食でありました。

荒野に食べ物などあるはずはなく、イスラエル 150 万の民はこのマナ無くして生きていくことは不可能でありました。

このマナあってこそ、イスラエルの民は厳しい荒野の中でも四十年間生きていくことができたのです。

その意味で、マナは神さまがイスラエルに与えてくださった「いのちの糧」と言うべきものでした。

イスラエルの民を愛し、どんな時にも彼らを守り、養い、生かしてくださる神さまの恵みの具体的なあらわれでありました。

イスラエルにいのちを与えたもう神さまは、

現実には「いのちの糧」なるこのマナを通して、彼らを生かし、彼らにいのちを与えてくださったのでした。

それなのに、いったい彼らの不平は何なのでしょう。

神さまが彼らに与えてくださるマナを「このみじめな食物」と呼んだのです。

神さまが彼らを愛し、その愛情の具体的な表現として日々与えてくださるマナを「このみじめな食物」と呼んだのです。

神さまが彼らを生かすために日々天から降らせてくださるマナを「このみじめな食物」と呼んだのでした。

「みじめな」とは

「卑しむべき、見下げ果てた、卑劣な、情けない、価値のない、役に立たない、無益な」といった意味です。

神さまのこの上なき愛情を彼らは「価値のないもの」と見下しました。

彼らのいのちに直結した、彼らを生かす恵みを「役立たず」と見下しました。

神さまの真心込めた尊い恵みを、無下に足で踏みつけたのです。

「私たちはこのみじめな食物に飽き飽きした」の「飽き飽きした」とは、

「ぞっとするほど嫌悪した、憎悪した、吐き気を催すほど嫌になった、ウンザリした」という意味です。

つまり、

「いい加減にしてくれ、もうウンザリだ、飽き飽きした！

こんな貧乏くさい情けない酷い食いモンはまっぴら御免だ！」というわけです。

でも、そんなことを言っても、

もしもイスラエルにマナが降らなかつたら、イスラエルの民はどうなってしまうのでしょうか。

間違いなく、彼らは荒野で飢え死にです。

それこそ本当に食べる物もなく、行けども行けども見渡す限りただ広大な荒野の中で、完全に飢え死にするしかありません。

そもそもイスラエルはこれまで何度滅亡の危機に瀕してきたことでしょうか。

もともと彼らはエジプトの奴隷でありました。

その彼らを神さまは特別な大いなる救いの御手をもって救い出してくださいました。

エジプトを脱出した後も、

目の前の紅海を真っ二つに分け、追い迫るエジプト軍を打ち滅ぼして、イスラエルを救い出してくださいました。

荒野で渴き飢え死にするところを、

水を湧き出させ、天からマナを降らせ、時にはうずらまで食べさせて、イスラエルを飢え死にから救い出してくださいました。

しかも、

神さまに背いて罪を犯した後も神さまは変わることなく憐れみを示し、罪深いイスラエルに必要な糧を日々与えてくださいました。

彼らが四十年間荒野をさまよわなければならなかったのも、

もとはと言えば彼らの背信のゆえであったわけですが（民数記 14 章）、

しかし、それでもなお、

神さまはそのような罪深いイスラエルを見捨てることなく、天からマナを降らせてイスラエルを養ってくださいましたのでした。

それなのに、

「このみじめな食物に飽き飽きした」とは何という言いぐさでしょう。

彼らはどこまで神さまをバカにしたら気がすむのでしょうか。

罪に滅び行く彼らを生かす「いのちの糧」を「みじめな食物」と呼び、

こんな酷い食いモンは「もうウンザリだ、飽き飽きした、あまりに嫌で反吐が出る！」とまで言うのです。

さすがの神さまも、彼らのあまりの悪態ぶりに、とうとう堪忍袋の緒が切れます。

## 6 . **そこで主は民の中に燃える蛇を送られたので、蛇は民にかみつ、イスラエルの多くの人々が死んだ。**

神さまは「燃える蛇」を送って「多くの人々」を殺します。

「燃える蛇」とは、おそらく噛みつかれると毒が回って燃えるほど痛いので「燃える蛇」と呼んでいると思われます。

これまで忍耐に忍耐を重ねて死ぬべきところを生かしてあげておいたのに、

少しも感謝することなく、むしろ不満をぶちまけて、

せっかくあげたいのちの恵みを汚い足で踏みつけるとは...

かくなる上は、せっかく与えた彼らのいのちを再び奪い取って思い知らせるしかありません。

それで、神さまは「燃える蛇」を送ってかみつかせ、イスラエルの多くの人々を殺したのでした。

さて、私たちはどうでしょうか。

私たちのそれぞれ置かれている環境や立場は異なると思います。

でも、すべての人に共通していることは、神さまが養ってくださっているということです。

日毎の糧を与えて、今日も私たちを生かしてくださっているということです。

私たちの目には、それがどんなに見窄らしく見えても、どんなに貧しく「みじめな食物」に見えても、それは「いのちの糧」です。

私たちに生きるいのちを与え、私たちを生かす糧です。

天からのマナです。

奇跡のパンです。

最高の食物、神のパンなのです。

この広大な荒野の中で、この巨大な死の世界の中で、いのちを与えてくれる尊いパンなのです。

それを感謝もせず、足蹴にして、

「このみじめな食物に飽き飽きした。」と言う時、

神さまは「燃える蛇」を送って私たちに思い知らせるのです。

自分の罪を思い知らせます。

私たちが死ぬべき者であることを思い知らせます。

そして、罪からの救いが必要であることを思い知らせるのです。

こうなってはじめてイスラエルの民は自分の罪を思い知って悔い改めます。

## 7. 民はモーセのところに来て言った。

**「私たちは主とあなたを非難して罪を犯しました。**

**どうか、蛇を私たちから取り去ってくださるよう、主に祈ってください。」**

**モーセは民のために祈った。**

## 8. すると、主はモーセに仰せられた。

**「あなたは燃える蛇を作り、それを旗ざおの上につけよ。**

**すべてかまれた者は、それを仰ぎ見れば、生きる。」**

そこでモーセは一つの青銅の蛇を作り、それを旗ざおの上につけて掲げます。

## 9. モーセは一つの青銅の蛇を作り、それを旗ざおの上につけた。

**もし蛇が人をかんでも、その者が青銅の蛇を仰ぎ見ると、生きた。**

不思議なことに、たとえ蛇が人をかんでも、その者が青銅の蛇を仰ぎ見ると、生きたのでした。

この青銅の蛇とは何者か、それは救い主イエスさまを表す型であると、後にイエスさまは解説なさいました。

**「モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子もまた上げられなければなりません。**

**それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです。」**（ヨハネ 3:14-15）

**「地の果てのすべての者よ。**

**わたしを仰ぎ見て救われよ。**

**わたしが神である。ほかにはいない。」(イザヤ 45:22)**

仰ぎ見るだけで救われるのです。

自分が死ぬべき罪人であることを悟り知って、救い主イエスキリストに救いを仰ぎ求めるだけで、救われるのです。

他には何もありません。

お金も、学問も、地位も、善行も、修行も必要ありません。

ただ救い主イエスキリストを仰ぎ見て、救われるのです。

救いは、ただ神さまの憐れみにより、恵みによって、ただで与えられるのです。

天から一方的に降ってくるマナのように、恵みによって与えられるのです。

イエスさまを信じて、救われるのです。

あとは、私たちが、その神さまの恵みを拒まないことです。

**「このみじめな食物に飽き飽きした。」**とつぶやかないことです。

むしろ、神さまが下さる恵みをそのままいただくことです。

そして、神さまに感謝することです。

私たちは話にならない罪深いものですが、

しかし、神さまは、このような者をも見捨てることなく、

むしろ憐れんで、私たちの身代わりにイエスさまを十字架につけて私たちを罪を贖ってくださったのです。

私たちは、その神さまの恵みを受け入れるだけでよいのです。

私たちが十字架に架かる必要はありません。

イエスさまが十字架に架かって死んで下さったので、十字架に架かる必要はありません。

むしろ、私たちは、神さまがくださる救いの恵みを、喜んで、感謝して、そのままいただくだけでよいのです。

ここに集われたみなさんひとりひとりが、

神さまが与えて下さる恵みを、喜びと感謝をもっていただいて、

この新しい年も、心新たに神と人に仕えて生きていかれるよう、主の御名によって祈ります。